

Three Visual Principles

A Theory of Difference, Relation, and Dynamic Equilibrium

Revised Edition, Version 2.0

改訂第2版

三視覚原理——差異・関係・動的均衡に基づく制作理論

Tomo SAKURAI

2026

Abstract - 人間は差異を通して世界を知覚する。しかし、その差異はしばしば固定された二項対立として理解され、価値づけられる。一方、現実には存在する事物や現象は明確に分断されたものではなく、連続的な変化と相互関係のなかにある。本稿では、差異を対立として固定するのではなく、関係として観察し、構成し、知覚するための操作原理として、「Black & White」「Color」「Ma」からなる三視覚原理を提示する。制作において、素材は熱、重力、流動、乾燥、酸化、凝固などの物理作用に応答する。そこで生じる複数の力は、互いを打ち消すことなく作用し合い、差異を保ったまま一つの状態を一時的に成立させる。本稿では、このように力の関係から生起する状態を、動的均衡と定義する。私の作品は、物質そのものやあらかじめ定められた形態を表象するものではない。そして制作とは、物質と空間に作用する複数の力を観察し、それらの関係が一時的に成立した状態を作品として物質的に定着させる試みである。

1 差異の認識

1.1 差異による知覚

人間は対象を知覚する際、対象を他との差異を通して認識する。明暗、大小、遠近、静動などの違いが存在することで互いに区別され、一つの存在として知覚される。

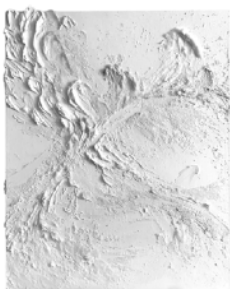
差異は対象を識別するための条件であり、知覚が成立するための出発点である。もし差異が存在しなければ、対象を区別することはできず、物事は均質なものとしてしか現れない。

本理論では、この差異を人間の視覚認識を考える上での基本的な前提として位置づける。

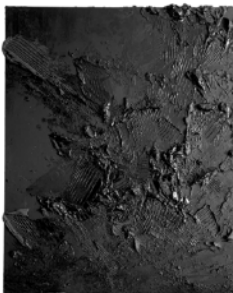
1.2 識別と境界

対象は明暗、色彩、質感、密度、位置、方向などの違いによって、他のものから区別される。この過程で成立する境界は必ずしも物理的な輪郭や線を意味しない。対象を他から分けて知覚するための認識上の区切りである。

したがって境界はあらかじめ固定された実体ではなく、差異が知覚され、対象が識別される関係のなかで成立する。



Black



White

図1 光と影の関係によって成立する明暗の知覚

2 二項対立

2.1 差異の整理

知覚された差異は、そのまま受け取られるだけでなく、類似するものと異なるものに分けられ、世界を理解するための枠組みとして整理される。この枠組みは複雑な世界を把握するための認識上の操作であり、対象そのものの本質を直接示すものではない。

2.2 二項対立という認識構造

認識の枠組みとして整理された差異は、しばしば対照的な二つの位置として理解される。明暗、善悪、生死、秩序と混沌などは、その代表的な例である。

このような二項対立は、複雑な世界を理解するための有効な認識構造である。

一方で、本来は多様な差異を、固定的で対立的な関係として捉えやすくする側面も持つ。

本理論では、二項対立そのものを否定するのではなく、人間が世界を理解するための認識の一形式として位置づける。



Dark



Light

図2 差異が対照的な二つの位置として整理された状態

3 連続性

3.1 固定された境界ではない世界

二項対立は世界を理解するための有効な認識構造である。しかしそれは、現実そのものを表しているわけではない。実際の事物や現象は、時間、環境、位置、作用

などの条件によって変化し、常に同一の区分にとどまるものではない。

そのため、固定された境界だけでは、現実には生じる変化を十分に捉えることができない。

3.2 連続性としての世界

世界を連続的なものとして捉えるとき、対立する二つの位置は固定された両極ではなく、そのあいだには複数の状態と移行の可能性が存在する。

二項対立として理解される多くの事象も、絶対的な区分ではなく、条件に応じて状態が変化する一つの過程として捉えることができる。

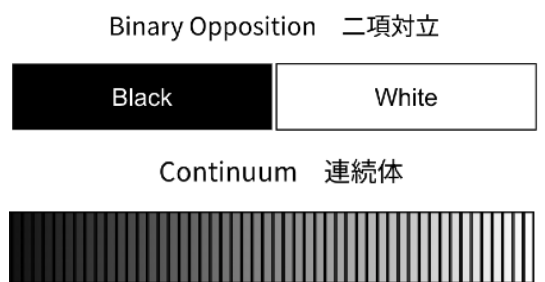


図3 二項対立と連続体の概念的比較

3.3 関係として捉える

連続性を前提とするならば、差異は固定された境界を示すものではなく、異なる状態どうしを結びつける契機として理解される。

重要なのは、対象をいずれか一方へ分類することではなく、複数の状態がどのように作用し合い、一つの状態を成立させているかを捉えることである。

次章では、このような差異の相互作用を「関係」として位置づけ、その構造について考察する。

4 関係

4.1 変化する関係

素材どうしの関係は、一旦成立した後も一定に保たれるとは限らない。位置、方向、時間、環境、物質の状態など、いずれかの条件が変化すれば、要素どうしの結びつきも変化する。

関係とは、固定された配置ではなく、条件に応じて変容し続ける構造である。

4.2 部分と全体

一つの要素が変化すると、他の要素との関係も変わり、全体の状態に影響する。したがって全体は、個々の要素だけでなく、それらの関係によって成立する。

4.3 関係は状態として現れる

関係そのものを直接見ることはできない。しかし、複数の要素が相互に作用した結果は、一つの状態として

現れる。その状態は個々の要素だけでは説明できず、それらのあいだに形成された関係によって成立する。

5 三視覚原理

5.1 三視覚原理とは

第1章から第4章では、人間が差異を知覚し、認識し、関係として理解するまでの過程を考察した。本章では、それらの認識構造を制作へ応用するための操作原理として、「Black & White」「Color」「Ma」からなる三視覚原理を提示する。

三視覚原理は、世界を説明する理論ではない。差異、連続性、関係を作品のなかで構成し、観察するための制作原理である。

5.2 Black&White

Black & Whiteは、差異を明確に知覚するための視覚原理である。制作では、対象を識別させるさまざまな視覚的要因のなかから、対照的な二つの位置を暫定的に設定し、要素間に生じる差異や緊張を可視化する。

ここでいうBlackとWhiteは、色彩としての黒と白だけを意味するものではない。知覚上の差異を際立たせる二つの位置を示す概念であり、世界を固定的に二分するためのものではなく、差異とその関係を観察するための操作原理である。



図4 《inner space》(2023)



図5 《Bias》(2026)

5.3 Color

Colorは、固定された二つの位置のあいだに存在する連続性と移行の可能性を可視化するための視覚原理である。制作では、色彩の変化、混交、重なり、濃淡などを通して、要素が明確に分断されことなく、複数の状態へ移り変わる過程を構成する。

ここでいうColorは、単に多色を用いることを意味しない。Black & Whiteによって示された差異のあいだに生じる変化や幅を捉え、固定された区分では捉えきれない連続的な状態を観察するための操作原理である。



図6《Signal》(2025)



図7《Abyss | 深淵》(2026)

5.4 Ma

Maは、異なる要素が互いの差異を保ったまま関係を構成するための視覚原理である。制作では、余白、距離、位置、方向、密度などを操作することで、要素同士が互いを打ち消すことなく共存し、一つの関係を形成する場を構成する。

ここでいうMaは、単なる空白や余地を意味するものではない。要素どうしの関係を成立させ、その相互作用を知覚可能にするための能動的な構造である。



図8《刻相図 | Kokusōzu - Diagram of Etched States》(2025)

6 動的均衡

6.1 動的均衡とは

動的均衡とは、異なる要素が互いを打ち消すことなく拮抗し、差異を保ったまま一時的な均衡を形成する状態である。

それは静止や恒久的な安定を意味するものではなく、関係の変化に応じて常に変容し得る。

6.2 力の関係としての均衡

動的均衡を成立させるのは、個々の物質そのものではなく、それらに作用する複数の力の関係である。重力、熱、流動、乾燥、酸化、凝固などの作用は、それぞれ異なる方向と強度をもちながら、物質の形態や状態に影響を及ぼす。

したがって、ここで注目されるのは完成した形態だけではなく、その形態を成立させた力の配置と作用の過程である。

6.3 三視覚原理と動的均衡

三視覚原理は、動的均衡を構成する固定的な三要素ではない。

Black & Whiteは差異と緊張を明確にし、Colorは状態の連続性と移行を示し、Maは異なる要素が関係を形成するための構造をつくる。

三つの原理の比重や現れ方は、作品ごとに異なり、常に同じ割合で用いられるわけではない。動的均衡は、これらの原理を通して構成された諸要素の関係から、一時的な状態として現れる。

7 素材の応答

7.1 物理作用による素材の変化

素材は物理作用に応答し、状態を変化させる性質をもつ。熱、重力、流動、乾燥、酸化、凝固などの作用によって、作者の制御を部分的に超えた変化が生じる。

制作では、素材を一方的に形づくるのではなく、その応答と変化の過程を観察することが重要となる。

7.2 条件の設定と選択

制作とは、条件を設定し、そのもとで生じる素材の応答を観察し、必要な状態を選択する行為である。

そのため制作は、完全な制御にも、偶然への依存にも還元されない。

8 作品

8.1 作品は状態の定着である

私の作品は、物質そのものや、あらかじめ定められた形態を表象するものではない。物質と空間に作用する複数の力の関係が、一時的な状態として物質に定着したものである。

作品に現れる形態は、素材の応答と力の関係から生じた結果である。

したがって作品は、完成した形態そのものではなく、その成立に関わった関係的な状態の定着として位置づけられる。

結論

本稿では、人間の知覚を差異から出発し、識別、二項対立、連続性、関係という認識の過程を整理した。その上で、それらを制作へ応用するための操作原理として三視覚原理を提示し、その関係から成立する状態を動的均衡として位置づけた。

制作において重要なのは、物質そのものや完成した形態ではなく、素材に作用する複数の力が関係を結び、

一時的な状態として成立する過程である。作品とは、その状態を物質として定着させた結果である。

本理論は、世界を唯一の方法で説明するための体系ではない。差異、連続性、関係を観察し、物質を通して新たな状態を構成するための、一つ制作原理として位置づけられる。また、固定された体系として完結するものではなく、今後の制作と観察を通して更新され続ける実践的な枠組みである。

参考文献

- Aristotle, *Nicomachean Ethics* (『ニコマコス倫理学』)
- Samuel Taylor Coleridge, *Biographia Literaria* (『文学的自叙伝』)
- Claude Lévi-Strauss, *La Pensée sauvage* (『野生の思考』)
- Henri Bergson, *L'Évolution créatrice / Creative Evolution* (『創造的進化』)
- Gilles Deleuze, *Différence et répétition / Difference and Repetition* (『差異と反復』)
- Alfred North Whitehead, *Process and Reality* (『過程と実在』)
- John Dewey, *Art as Experience* (『経験としての芸術』)
- James J. Gibson, *The Ecological Approach to Visual Perception*
- Rudolf Arnheim, *Art and Visual Perception: A Psychology of the Creative Eye*
- Paul Klee, *The Thinking Eye: The Notebooks of Paul Klee, Volume 1* (『造形思考』)
- Wassily Kandinsky, *Point and Line to Plane* (『点・線・面』)
- 福岡伸一『動的平衡』

Three Visual Principles

Revised Edition, Version 2.0

著者：Tomo Sakurai

発行年：2026

© 2026 Tomo Sakurai. All rights reserved.